
コメント

定延利之 「た」発話をおこなう権利

「た」には「探してた傘、こんなところにあった」のような「ムードの「た」」と呼ばれる用法がある。この用法は、本質的には「過去」を表すものであるとする考え方があり、本論文はそうした立場の正当性を論じたものである。この用法の一種である「発見の「た」」について言えば、それが用いられるのは「情報のアクセスポイント」として「体験時」が選ばれるときに限られる。さらに、「発見の「た」」を発話できるのは会話の当事者に限られ、「部外者」はそれを発話できない。本論文は言語形式の許容度に文脈が大きく影響していることを改めて実感させてくれる。(1)

遠藤直子 初級文型を用いた表現教育

——中級レベル口頭表現クラスにおける
「ミニドラマ」の実践を通して

初級レベルの文型を中級学習者が適切に使いこなせるようになるための表現教育の一つとして、「ミニドラマ」の授業を実践し、その活動内容を分析した論文である。グループでのシナリオ作成、アクトアウト、そしてその後の話し合いという一連の創造的な活動の中で、学習者が、与えられた状況や人間関係などを考慮しながら適切な言語表現・待遇表現を選び取って使いこなすことを学ぶプロセスが具体的に示されている。(M)

筒井千絵 依頼の接触場面における母語話者の言語調整の特徴

外国人と話すときの特別な話し方をフォリナー・トークと言う。これまでの研究で日本語教師が用いるフォリナー・トークは一般の日本語話者のものよりわかりやすいことが指摘されている。本論文では「自治会加入の勧誘」のロールプレイを通して、両者の違いが考察されている。結論として、日本語教師の発話には「敬語および婉曲表現の不使用」という特徴が見られ、その発話が実質的内容の伝達を重視していることが明らかになった。(1)

藤城浩子 ノダの提示方法に関する一案

——メタファーを用いた意味・機能提示

ノダの意味は抽象的であるため日本語学習者への説明が難しい。本論文では「ドアのメタファー」を用いて学習者にノダの意味を伝えるという案を提示している。これは絵を見せ、学習者にその背後にあるものの存在を意識化させた上で、「種明かし」として別の絵を見せ、両者をつなぐものとしてノダが存在していることを自覚させるというものである。本論文の価値は現場の日本語教師の経験知をわかりやすい形で可視化したところにある。(1)

古川敦子 日常場面における日本語の自己評価に関する一考察
——交換留学生に対するインタビュー調査から

教室場面ではない日常の様々な場面における学習者の自己評価を日本語教育に活用することを提案する論文である。交換留学生3名に対して1年間に6回のインタビュー調査を縦断的に行い、学習者が日常生活の中で自らの日本語能力を評価し、その向上と問題点を認識している様子が具体的に示され、また評価自体のあり方も多角的な方向に変化したことが明らかになった。学習者が生活の中で学ぶ過程が示された点でも興味深い。(M)

庵 功雄 中国語母語話者による漢語サ変動詞の
ボイス習得研究のための予備的考察

中国語母語話者にとって漢語サ変動詞のボイスには習得が難しい部分がある。本論文では日中同形同義の動名詞を用いて、アンケートによって学習者のレベル別に漢語サ変動詞のボイスの習得状況を調査した。その結果、非対格自動詞（の一部）、非対格自動詞の他動詞形、使役では学習者の回答にゆれが見られたのに対し、非能格自動詞、他動詞、受身ではゆれはほとんど見られなかった。本論文は漢語サ変動詞のボイスを本格的に考察する上での基礎資料としての価値を持つものである。(M)

呉 秀賢 ドラマに見られる呼びかけ表現の日韓比較
——韓国ドラマ「冬のソナタ」を例に

呼びかけ表現の研究方法は従来、アンケート調査が主であったが、この論文ではシナリオを使用して、より現実に近い表現の実態を捉えようと試みている。韓国語の呼びかけ表現を23種類に分類し、人間関係と場面によってどのような呼びかけ表現が出現したかを全調査した。さらに韓国語と日本語を比較し、両言語の呼びかけ表現の類似点と相違点をまとめ、コミュニケーションを重視した日本語教育に資する研究となっている。(M)

金井勇人 なぜ聞き手を表す「そのN」は非丁寧になるのか

「その先生、質問があるのですが」という文の「その先生」は非丁寧である。指示詞の直示用法には人称区分型と距離区分型があるが、この場合の「その」はこのいずれとも異なる。こうした「その」は談話の初めの、聞き手が相手から話しかけられていることを自覚する以前の段階にのみ現れる。そして、このような話し手と聞き手の間の非対称性から非丁寧さが生じていることを本論文は説得的に論証している。(1)

キャアコップチャイ スィラッサナン 「だろう」の意味・用法
——小説における分析

本論文は「だろう」を、推量・確認・疑念・婉曲的質問・感動の5用法に分け、さらに2000年以降に刊行された小説8作品に出現した全「だろう（でしょう）」を、地の文・会話文ともに分類した。近年「だろう」の研究では、話し言葉で多用される「確認」用法への注目が高まっているが、ことに海外で日本語を学習・研究する際の材料として重要な位置を占める小説では「推量」の位置づけが高いことが示された点も興味深い。(M)

張 志剛 変化の程度を表す「大きく」「激しく」について

通説では、動詞を修飾する形容詞の連用形は「速く」のように「動作の様態」を表す（「速く走る」）か、「赤く」のように「動作の結果状態」を表す（「壁を赤く塗る」）かであるとされている。しかし、「大きく」「激しく」にはそれ以外の「変化の程度」を表す用法がある（「救済対象を大きく広げる」「人口が激しく減る」）。本論文は形容詞連用形が表す意味の新たな一側面を明らかにしたものである。(I)

森 篤嗣 「まで」と「までに」の肯否体系について

時間を表す「まで」と「までに」の違いはよく取り上げられるが、その大部分は文末が肯定の場合である。文末が否定の場合、「月末まで休みません」という文には事態が生起する解釈（休まないという事態が生じるのは月末である）と事態が継続する解釈（休まないという事態は月末まで継続する）という2つの解釈がある。「次は」が共起すると前者の解釈に傾き、「～から」が共起すると後者の解釈に傾く。そして、前者の場合「マデ否定」は「マデニ肯定」と、後者では「マデ否定」は「マデ肯定」と意味的に対応する。本論文の価値は「マデ」と「マデニ」の全体系を明らかにしたことである。(I)

熊 鶯 日本語初級教科書における終助詞「ね」の機能とその中国語訳

日常会話において重要な機能を果たす「ね」は、教師にも学習者にも難しい項目である。この論文では、先行研究を参考にしつつも新たに「ね」の用法を7種に分類し、2種類の初級教科書に出現する「ね」を全調査・分析した。またその中国語訳から中国語母語学習者にとって易しい場合・難しい場合を示した。日本語学と日本語教育の連携、そして母語別の日本語教育という2つの点でも今後求められる研究実践となっている。(M)

何 志明 習得しやすい日本語複合動詞とは？
——香港人中上級日本語学習者の習得及び
使用実態予備調査を通して

複合動詞は自然な日本語の構成要素として、特に中上級学習者にとって重要だが、体系的に学習できる教材はあまりない。この論文は複合動詞全般の誤用と習得を概観する基礎研究とすべく、複合動詞を4タイプに分類し、2種の調査を行った。その結果、習得の易しいタイプ、難しいタイプが明らかになるとともに、学習者が作成した不適切な複合動詞から、母語干渉も含めた学習者の複合動詞理解のあり方も浮かび上がっている。(M)

湯浅千映子 小学生向けの文章の書き分けの諸相
——携帯電話の取扱説明書を資料に

子ども向けと大人向けの文章の違いを探るために、携帯電話の取扱説明書を資料とした着眼点のおもしろい研究であり、わかりやすい日本語表現のあり方をも示唆している。分析の中心は動詞で、調査の結果、小学生向けでは語種においては和語が、また意味分類においては易しいとされる語彙が使用されており、そこから抽象を避け、具体的な語彙を用いて情報を正確に伝えようとする書き手側の意図が明らかにされている。(M)